

狐物語

フランス文学にも、ヨーロッパ
 中世文学にも疎い私だが、この物
 語は愉しく読んだ。

主人公はルナールという名の悪
 狐。詐欺、暴力、強姦、偷み、
 ありとあらゆる非行を働き国王に
 処刑されそうになるのだが策謀で
 もって難を逃れ、性根もなく悪
 行を繰り返す。元祖ジカ
 レスク小説と
 でもいっべき
 作品である。

主人公と言い、登場人物と言っ
 のも可笑しいけれど、国王は獅子
 のノール、ルナール狐は主膳
 正として家老に任じられている。
 ルナールの仇敵、狼のイザン
 グランはじめ、並みいる諸侯も山
 猫だったり、熊だったり、猪だ
 ったり、さながら古代ギリシアの
 「イソップ物語」である。だが、

あふれる批判精神と生活力

アイソポスのように教訓臭はな
 い。横溢するのは語り手の批判精
 神と生活力である。

ここで無意識に語り手と言っ
 しまったけれど、この物語の成立
 には種々な問題が未解決のまま残
 されているらしい。「『狐物語』
 は果たして、ある著者によって創

られ、写本を媒介とする伝承から
 発生したのか、あるいは民間の口
 承をその源とするのか。この『狐
 物語』の成立に関する謎は、武勲
 詩や南仏恋愛抒情詩の発生の謎
 と共に、フランス中世文学の提起
 する難問であり、永きにわたって
 論争が戦わされて今日に至ってい
 る」と解説にある。とにかく、研
 究者たちにとって大変な物語であ

るらしいのだ。「口承による『狐
 物語』と写本を媒介とする伝承に
 よる『狐物語』とを統合した『狐
 物語』の全貌を知る縁は望むべ
 くもないが」とした上で、幾つも
 の写本の特徴や何冊もの校訂本を
 紹介されると、こうした厄介な本
 を「文化」のために刊行した出版
 社に敬意を表さねばならない、
 と先ず思うのだ。その上で、これ
 は私のような一般読者にとっては
 肩の凝らない緑蔭の読みもので

あった、と言
 たい。訳が良か
 ったなどは生
 意気で言えな
 いが、日本語の表現がこなれてい
 て素晴らしい。鈴木寛、福本
 直之、原野昇訳。(白水社、五
 八〇〇円)

三枝 和子

◇鈴木一 一九三七年福島県生まれ。愛知県立大教授。福本一 一九三九年京都府生まれ。創価大教授。原野一 一九四三年兵庫県生まれ。広島大教授。

